

自由われらの園 国府高校100周年

一九七五年、夏の甲子園を懸けた全国高校野球選手権愛知大会で、私学の強豪を抑えて初優勝した国府高校(豊川市)。当時のエースで元プロ野球選手の青山久人さん(63)に、野球部での思い出や母校へのメッセージを聞きました。(聞き手・川合道子)

「国府高校の野球部に入速かったけれど、打たれてるきっかけは、実は野球部に入るつもりではありませんでした。中学三年の夏の大会で肘の感覚がなくなり、医者にやらない方がいいと言われました。入部希望調査の用紙には、第一、第二希望に茶道部と華道部、第三希望に野球部と書きました。」

入学後、野球部の藤田良彦先生から「多少でもやる気はあるのか」と聞かれ、事情を話したら「だめならだめでいいから、やってみたいなか」と誘ってくれました。もし先生が声を掛けてくれなかったら、野球を続けていなかったと思います。

もともとアンダースローではなく、スリークォーターで投げていました。球は

愛知大会の中京戦で投げる青山さん。国府高提供



卒業生インタビュー編③

元プロ野球選手 青山 久人さん(63)



甲子園出場 今も誇りに

「練習を始めたのですが、面

白いほど三振が取れるようになった。今思えば投球フォームを変えたことが、甲子園出場やプロ入りにつながった。人生の転換点になりました。」

「練習での思い出は、僕らのころは練習中に水を飲んではいけない時代。でも、のどはカラカラだった。「ロードワークに行ってくる」と言っていて、近所の全然知らない民家をノックして、「すいません、コップ一杯の水でいいから飲ませてもらえませんか」と頼んだこともありました。ロードワークはしたくなかったけれど、もらって飲んだ水はうまかったですね。」

「在校生へのメッセージをお願いします。野球を始めたとき、投げ方を教えられたことはありません。中学時代に買った野球の本が唯一の「先生」で、球の握り方や投げ方の写真に説明が添えてありました。僕は「一七六球、六〇キときゃしゃな体だったの」で、ほかの人と同じように投げてはダメ。自分の体の柔らかさや腕の使い方を考え、練習しました。誰から、「こうやってやれ」と言われてもやれなかった。今はちょっと調べればいろんな情報がある。指導者もたくさんいるが、アドバイスをつのみにする必要はない。自分に合っているかを基準に選択するべきで、選択するには、自分を知らなければいけない。野球部の活躍は、たまにチェックしています。もう一回、甲子園に出てほしいね。夢は向こうからは絶対にやっこない。頑張ってくださいと思います。」

あおやま・ひさと 1957年生まれ、岡崎市出身。76年、ドラフト3位で中日ドラゴンズに入団し、1年目から1軍で活躍。アンダースローで、細身の体格から「青えそんぴつ」の愛称で親しまれた。その後、南海ホークスへ移籍し、87年に引退した。現在は会社員。